

# 中年期の父親、母親と青年期の娘

——親子の性役割タイプと相互性について——

丸 島 令 子  
渡 辺 厚 子\*  
大 石 美 佳\*\*

## はじめに

ティーンエイジャーに成長した娘がたばこをすばすば吸い、おかまいなく携帯電話をかけまくり、気まぐれで怒りっぽく、駄目な親と決めつけて挑んできたりすると「とても親でなくては、あんな子、誰からも嫌がられるだろう」と、親はため息をつく。かれらは少し前まで親として適切な行動であったと信じていた、子どもが泣いたり笑ったり、しがみついてきて助けをもとめたりすると直ちに応えようとした、あの強い愛着関係に熱中していた親子関係はどうなってしまったのかと悩んだりする。親が中年期に達した今、かれらは青年期の子どもたちによって、みずからの過去の青年期の葛藤を追体験させられたり、みずからの人生やアイデンティティの再評価にせまられたりするかもしれない。それは何かいわれのない罰を受けているような気分に襲われるようなものであろう。生涯にわたって持続する親子の幾つかの節目における共変関係はどのようなものか、久世ら（久世、平石、1992）はこうした研究はようやくその緒についたところであるという見解を示している。

生涯発達理論を提示した E. H. Erikson (1950, 1963) は、中年期の心理社会

---

\*奈良女子大学大学院人間文化研究科

\*\*鎌倉女子大学家政学部

的な発達への傾倒と危機を「生殖性／停滞性 (generativity/stagnation)」と考えた。中年期とは暦年齢的にはほぼ40歳から65歳位とみなされているが、とくに統一した見解はない。ともあれ中年期に達した親は、若い親であった頃、子どもと共生していた平和で甘美な関係から、分離し自立しようともがき、異質な価値にまみれて大きくなった子どもと拮抗しまたもに対峙しなければならない容易でない関係に変わったことを意識する。それは親にとって、“産み、保護をする”というよりも“育み、世話をする”という異なったかかわりに移行してきたことでもある。Eriksonはこのことを中年期の発達課題である「生殖性」の第一義的な意味に位置づけた。かれによるとそれは、「次世代を確立させ導くことへの関心」であり、中年期の親がこの課題に取り組まないことは“産みっぱなし、墮胎的”であると述べられている。この点が重視されて、この概念はしばしば「世代性」と訳されている(鑑、1984)。Eriksonの生殖性の概念は世代性のみで表せないものとされているが、中年期の親の心理社会的危機は青年期の子どもとの相互性にあり、そうした関心の回避や傍観は結果として親自身の「人格的貧困の広がり」と「停滞性の泥沼に陥る」と考えられ、親の人格的成熟の契機となることが指摘されている。青年にとってはアイデンティティ確立の葛藤を克服するために親をはじめ成人が担う超自我的な機能や受容されるべき深い相互性の関係が希求され、その過程で青年は自己を試し、自己が深く関与していく世界を発見することができる。

本稿では最初に上記の中年期の親の人格的発達課題の観点から、いままでのような親子関係の研究がなされてきたかを検討する。さらにこのような親が子にたいしてかかわる行動や態度を説明する変数として「性役割」に注目した。なぜなら「親であること、親となること」は父親、母親の性別で分け合う両極面がある意味で問われるからである。しかしながら青年期の子どもにたいしても、幼児期、児童期の子どもにたいするように、父親、母親はそれぞれ二極化してかかわるのであろうか。あるいはかれらの性役割にはなんらかの変化がみられるのだろうか。また性役割に別の次元があるのだろうか。

親の性役割について久しくリードしてきた社会学的な観念は Persons (1956) の「父親：道具的役割」にたいする「母親：表出的役割」があまねく知れわたっている。さらに心理学者らも「父親：自立性、分離的役割」に、「母親：愛情、関係的役割」として示したり (Grossman, 1987)、「父親：独立的役割」と、「母親：親密的役割」(Gilligan, 1982) のように父親、母親が分担的、二極的にバランスをとって親子関係を形成するものと強調されてきた。柏木 (1993) は、とくに Freud (1856~1939) の「同一視説」は父親、母親が性役割のモデルとして子どもの発達に影響をおよぼすとし、発達初期には母親が重視され、その後父親、母親が分担的に子の社会化に寄与するとした仮説が久しく親に関する研究を方向づけてきたと説明している。

ところが1960年代後半から70年代に入り、生物学的に規定された特性である性 (sex) と社会学的・文化的な役割としての性・ジェンダー (gender) が区別して考えられるようになってきた。心理学では過去のおびただしい「性差」の研究結果が「性差は一般的に考えられてきたほど固定的でもなく、明確でもなく、時期などによる変動が多くみられる」ことを結局は明らかにしたといえよう (Oetzel, 1966)。そうしてジェンダー概念に基づく性役割論が導入されてきた。それはまた男性を含めた人間学的研究をめざす女性学の発達がジェンダーの研究志向を活発にさせてきたと考えられる。

それでは現代社会の父親、母親の性役割はどのように子どもに機能しているのであろうか。今日先進国で論議されている“養育する父親、育児をする父親”の出現は、従来の男性性 (男らしい)、女性性 (女らしい) という両極の一次元とは別の「両性具有 (androgyny)」の概念が注目されている。そしてそれは成人の人格の発達観に新しい地平をもたらしている。中年期の親にとって性役割の脈絡からとらえられる人格的特性は青年期の子どもとの相互性にどのように反映するのであろうか。また青年期の子どもは中年期の親と比較すると性役割の発達にどのような特徴がみられるのであろうか。本稿の後半ではこれらのことについて筆者らの調査結果に基づいて検討していく。

## 1. 中年期の親の“親であること”と人格的成熟—その研究アプローチ

近年（1996年11月）、家庭内暴力を繰り返した中学生の長男（当時14歳）を金属バットで殺害したとして殺人罪に問われた元団体職員の父親（当時52歳）をめぐる痛ましい親子関係の悲劇が報じられた。子ども自身にとっても、親にとっても成長し発達していくことは次々と新しい局面に出会い、課題や危機を担うこととなりその解決をせまられる。Rossi（1980）は中年期の親の研究において、母親たち（33～55歳、1923～1945年生）に「子どもにとって成長することの難しさ」と「親にとって子どもを育てることの難しさ」を問うたところ、図1に示すように子どもが幼児期には親のほうが子育てを難しいとしているが、子どもが青年期に至るにつれて、子どものほうが成長することに困難を感じているという母親たちの回答を報告している。それは長じるにつれ逆転しているが、方向としてはほぼ並行している。子どもが何人いてもこうしたことはそれぞれ異なった新しい経験として親子の間で繰り返されることであると考えられている。そして両者はその相互性のなかで成長か退行かという危機のときを体験する。その危機は上記のような悲劇的結末を招くことさえある。

前項でふれた Erikson はこうした点を洞察して成人中期の人格の成熟の次

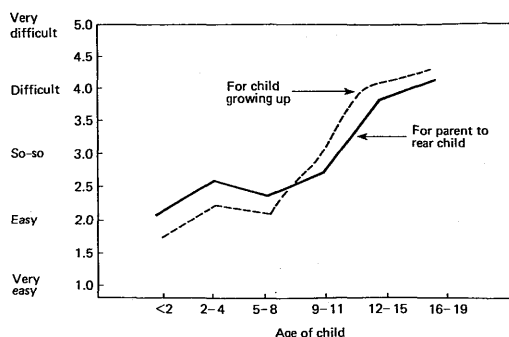


図1 Mean ratings on developmental and child rearing difficulty by age of child. (Rossi, A. S. 1980 p. 192 より)

元として「生殖性」を主唱したが、それはかれの精神分析家としての豊富な臨床的経験と研究結果からもたらされたものである。この臨床をベースにした理論の実証は難しく、とりわけ「生殖性」に関する検証はあまり多くはなされていない。その概念規定における方法論的な問題が指摘されてきた (McAdams & de St. Aubin, 1992)。

そうした事情のなかで、アメリカの研究の一つの Snarey, Kuehne, Son, Hauser, Vaillant (1987) らは、Erikson 理論の生殖性の概念が「親であること」のみを意味するだけでなくそれは「包括的な意味で産み出すこと、世代から世代へと産まれていくあらゆるもの、子ども、事物、技術、思想、芸術作品など、生みだし育むことを意味する (Erikson, 1950)」と定義されていることを認識しながらも、Erikson が生殖性の達成について「親であること」は絶対条件ではないが必要条件のように強調していることを重視して、それを第一義的に概念規定して研究している。それは343人の男性を調査対象者として面接法による40年にわたる縦断的研究である。かれらの研究目的は成人前期の結婚による子どもをもつことを選択と中年期になったときの生殖性の達成との関係から、中年期の男性の人格的成熟を検討しようとしたものである。

1940年に500人の対象者にたいして調査が開始されたその過程は多少複雑であるが、対象者は14歳前後 ( $14 \pm 2$  years) に最初の面接を受け、心理社会的な面としては児童期の発達課題の「勤勉性／劣等感」について評価された。さらに25歳、35歳のときに結婚状況、子どもの有無、親となることの取り組みについて調査され、47歳のときに結婚をしている被験者の343人が最終的な対象者とされた。かれらにたいして最初の結婚以来「親となること」にどのような解決をしたか (子に恵まれる、医学的な助けにより子に恵まれる、養子をとる、子無し) が調査され、「生殖性」の達成と結婚状況との関連性が検討された。そのとき「生殖性」という発達課題達成の指標とされたものは、自分の子どもにたいして心身の発達や健康を高め維持するための実際的な行動を伴う「子育ての責任」ばかりでなく、他の若者や社会にたいして指導的な役割をしたり「世

話」をしていることに焦点がおかれた。そこから ①結婚して親となることはそのみが十分条件ではないにしろ、アメリカの男性にとって中年期の発達課題達成の基盤となることが示唆され、また②子どもに恵まれにくく、養子をとったり、医学的助けにより恵まれた父親は、子どもの無い男性より中年期の発達課題を達成していることが判明し、「生殖性」は生物学的に父親になることのみと関連しているわけではないと考えられた。そして③中年期の発達課題の達成は養子をとった父親が最も高く、次いで医学的助けにより子に恵まれた父親、その次に子に恵まれた父親で最後が子どもの無い男性の順として示された。さらに④中年期の発達課題の達成と結婚の幸福感とは相関しており、⑤児童期の発達課題「勤勉性／劣等感」と後年の中年期の発達課題の達成とは関連していることが示唆されて、Erikson のいう生涯的な発達論が支持された。つまりこの研究からもたらされる示唆は、中年期成人にとって、既婚、未婚、生物学的、社会学的親のみならず中年者は“親らしい：parental”「世話」の感覚（生殖性）を発達させ、青年期の若者の発達過程に自己を投入し自分自身の人格の成熟に取り組むことにあるという点にみいだされる。

以上のような多大な時間や資源を必要とする縦断的研究はわが国では極めて少ない。また中年期の父親についての研究も多くない。ところが近年わが国では、成人女性のライフサイクルやライフコースは、過去に男性にたいして行なわれたそうした研究（Levinson, 1978；Gould, 1972；Vaillant, 1977）から導かれた発達プロセスとは異なった特質をもつのではないかという見解が示され、成人女性のアイデンティティの発達研究の成果が蓄積されている（岡本、松下、1994）。そこでこのような成人女性のアイデンティティの発達と関連して、中年期の母親の「生殖性」についての実証的研究が試みられている。

岡本（1994）は4つのライフスタイル（結婚、結婚・仕事両立、子育て後両立、未婚）に属する31歳から53歳の女性100名にたいして、青年期のときの「進路の選択」の仕方や「職業決定と関与」の仕方とともに「育児への関与」の仕方とアイデンティティ達成との関連性について質問紙法により調査し検討して

いる。それによると「生殖性」に関係する育児への関与とアイデンティティ達成との関連性はみいだせなかったことを報告している。岡本はそれについて、母親行動がアイデンティティの成熟にはたす役割という問題は、人格のより深い次元で考察していく必要があると述べ、質問紙レベルでは把握しきれないことを指摘した。それを受けて堀内（1993）は中年期（平均年齢：42.3～44.4）の専業主婦：17名、看護婦：23名、教師：19名の職業による対象者別に「半構造的面接法」を用いてアイデンティティ形成の力動的変化過程を調査することを試み、アイデンティティの構成要素に「生殖性」における「世代性」を含め検討している。研究の結果は、3群に共通して中年期に子育てが妥当であったかどうかを確かめる子育て再考がみられ、Eriksonの主張と一致する点が示唆されたとする。しかしながらアイデンティティの発達変化と「世代性」との関連性は明確ではないものと考えられた。

一方アメリカにおいても女性のアイデンティティ発達論の研究は多く、近年、中年期の女性についても関心が向けられ、「生殖性」との関連性からも検討されている。HaanとMacDermid（1994）は中年期の母親（age Mean=41.5, range 31～61）257人と女子大生（1～4回生）の212人にたいして3つの研究目的：①2群のアイデンティティ達成の次元（達成、モラトリアム、早産型、拡散型）の比較、②中年期の母親のアイデンティティ達成と心身の健康との関係、③アイデンティティ達成と「生殖性」との関連性について横断的研究を行なっている。その結果、アイデンティティ達成の次元では両群に有意な相違はみられなかったが、中年期の母親は「モラトリアム」状況は女子大生よりも少ないが拡散型は女子大生よりも多いと報告されている。また中年期の母親のアイデンティティ達成の次元の相違はかのじよらの心身の健康（自尊感情、生活満足感、うつなど精神状態、自己統制感）と相関していることが示唆された。ところが「生殖性」とアイデンティティとの関連性は少し複雑な結果をもたらしている。この研究では「生殖性」の概念に「親であること」と「配偶者」「市民」「勤労者」のような特定の役割から規定し、アイデンティティと「生殖性」との

関係が検討されている。そのとき、「親であること」と「配偶者」の役割における生殖性はアイデンティティの達成に有意に寄与することが示されている。それはまたアイデンティティ達成型とその対極の拡散型の人は生殖性にプラスとマイナスの強い関連性がみられることも報告されている。

以上のような中年期女性の研究では、アイデンティティ達成の課題は青年期に限らず生涯を通して繰り返し再体制化されるものであること（岡本、1994）、中年期においてはそれは心身の健康に寄与すること、また「親であること」の役割に基づく中年期の発達課題の達成はアイデンティティ達成と関係していることを理解させるものである。しかしながら個人差が拡大してくる中年期成人の心理社会的研究には、教育レベルや文化的特性などの属性も考慮する必要もあり、変数の取り扱いにはより工夫がなされなければならないと思われる。また縦断的、横断的な研究方法や質問紙法、面接法の研究方法とも長所、短所がみられる。

親の研究では、さらにもう一方で、柏木と若松（1994）が「“親となること”による人格発達；生涯発達の視点から親を研究する試み」という精力的な研究を行なっている。調査対象者は3～5歳の幼児をもつ父親と母親346組であるため成人前期の比較的若い親の研究である。そこでは“親となること”による人格的発達は柔軟性、自己抑制、視野の広がり、自己の強さ、生きがいの発達がみられ、いずれの面でも父親よりも母親において著しいことが報告されている。このような実証的研究によって柏木は男性が“親となること”についての発達心理学的な研究と関心を喚起させようとした。

以上のように中年期の親の人格的成熟に関する研究は、それぞれ調査対象者や研究の方法が選択され、ほとんどが Erikson 理論を重視して仮説をたてているが、未だ統一した理論に至る研究結果がもたらされたとはいえないだろう。わが国では今日「団塊の世代」とよばれる大量の中年群の存在があり、かれらが次世代におよぼす影響は大きいと考えられる。そのため、真に成熟した中年者の人格とは何かを追究し、検討する必要があると思われる。そこで次項では



「性役割」をめぐる中年期と青年期の親子の人格特性を中心に、その相互性について検討していく。

## 2. 成人親子の性役割タイプと相互性についての研究

心理学が発達した西洋文化において、成人の人格的特性に性役割同一視は欠かせない概念とされている。端的に“男らしさ”「男性性」は道具的、達成志向、独立性として表され、“女らしさ”「女性性」は表出的、養育的、社交性、依存性のように示されてきた。ところが生涯発達心理学が発達してきた1970年代から、若年男女はそれぞれ男性性、女性性の特性が明確な自己概念を有しているが、老年になるほど自己と対極の性の特性を自己概念に組み込んでいく傾向がみだされるようになった (Neugarten & Gutmann, 1968; Fitzgerald, 1978; Sinnott, 1982)。これらの研究では中年男女についてはあまり明確な結果はもたらされていない。ただそうしたなかで、Monge (1973, 1975) は、思春期から老年期までの男女の自己概念の研究で、男性性の強い「達成因子」の人格的特性が他の時期の成人と比較して中年期の男女に強くみられ、それも中年男性のほうが中年女性よりも高いことを報告している。さらに Monge は「男性性」は老年男女に相違がみられなくなることも示唆した。そこでこうした研究から性役割に基づく自己概念が人生段階の環境や家族の機能等によって変化することが推測された。

Bengtson (1973) や Feldman ら (Feldman, Biringen & Nash, 1981) は性役割に関連する自己概念は年齢よりもライフステージが影響要因になると指摘している。つまり、伝統的な男性的、道具的役割と女性的、表出的役割に分けられる性差は、家族生活周期の親である時期によって異なり、若い親であるライフステージにその差が最も大きく、後年の親である時期はその差がばやけたり、逆転傾向さえみられると仮定された。

Gutmann (1975) は中年期やそれ以降における父親、母親の役割の解放の増大とその必要性の減少が要因となって、互いに相手の特性を取込み性役割の逆

転が生じると考えた。また Bem (1974, 1977) は「両性具有性」という性役割を概念化しようとしたが、その際、「男性性」と「女性性」は一次元のものではなく、両極でもなく、人は男性的、女性的属性を両方とも示すことができると仮定した。そうして Bem (1974, 1981) は「男性性」「女性性」「両性具有性」を測定する「The Bem Sex Role Inventory (BSRI)」を発展させた。Bem によると成人の両性具有性への人格的変化はそれぞれが男性性、女性性を喪失するのではなく、両性の特性が一体化される高いレベルでの人格的成熟を意味するものと考えられた。そしてかのじょは両性具有性の人は男性性、女性性のいずれの人よりも柔軟的で、独立しているのはもちろん、心理的により健康であるという仮説をたてた。

こうした研究や理論が展開してきた背景には、成人の発達心理学的な視野をもたらしたほとんど最初の理論家である Jung (Jung, C.G., 1875~1961) に負うところが大きいと考えられる。またかれは中年期の人格的成熟について関心をもった最初の心理学者である。その基本的な理論は人は加齢にともない両性具有性に移行すること、また加齢にともない内向的になるという仮説を提唱したものである (Meier, 1972; Singer, 1976)。

以上のような性役割論をふまえ、日本においてもこうした理論が有効かどうかを探るため、次項では筆者らの実証的研究のデータに基づいて成人親子の性役割と親子の相互性について検討する。

#### (1) 研究の目的と方法

今回の研究の目的は①成人親子の性役割タイプを比較することによって「加齢による両性具有性への移行」について、中年期の両親の傾向を検討する。次に②両親の性役割タイプによる青年期の子ども（娘）との相互性について、親が子に働きかける「親の態度」から検討する。「両性具有性」タイプの親はより良好な親の態度を示すことが仮定される。そして③性役割タイプと人格的、心理的安定性について世代間の比較をする。そのとき「両性具有性」タイプは人格的、心理的に安定していると仮定される。

以上の目的のために調査対象者は76組の女子大生とその両親（N=228）とし、1994年12月～1995年3月に質問紙法による調査を行なった。

調査の手続きは、①性役割タイプの検討のために「The Bem Sex Role Inventory [BSRI]」（7件法、40項目）、②親子の相互性の評価のために「親子関係診断テスト」（田研式、3件法、50項目：一部修正）、③Rosenberg「自尊感情尺度」（4件法、10項目）と④「C. A. S. 不安診断検査」（3件法、40項目）を人格的、心理的安定性の検討のために採用した。以上を年齢、性別、教育年数、職業、家族構成等の属性を問う質問よりなるフェースシートとともに質問紙の冊子を作成し、女子大生には集団で調査し、ついでかのじよらの両親たちに回答してもらうように同じ質問紙を渡し、2週間後に回収した（回収率：約82%）。回答のための所要時間は約30分である。なお上記①と②のスケールの説明は次項で行なうが、③と④は一般的なスケールであるため説明を省略する。

## (2) 結果

調査対象者の属性についてまとめると、平均年齢は女子大生（大部分は2回生）：娘は20.13 (SD, .34)、父親は49.91 (SD, 4.09)、母親は46.96 (SD, 2.75) である。親子とも近畿圏に在住している。父親は専門職と管理職で半数を占め、学歴も大卒または高専卒以上が75%となっている。平均教育年数は15.14年である。母親は主婦が半数を占め最も多い割合であるが専門職も13.2%みられた。大卒および高専卒以上が55.3%で平均教育年数は13.61年である。家族構成は核家族が68.4%で最も多い割合となり、子どもの数は2.34人である。

### 1) 成人親子の性役割

最初の研究目的のために用いた「BSRI」は、「男性性」20項目、「女性性」20項目ずつ、各項目は「まったくその通り～まったくそうではない」の7点評価である。中央値による分割法を採用し、親・子の各群の男性性中央値と女性性中央値により“cut-off point”（M. M=4.2、F. M=4.6）を定めた。それについては、Bem (1975) の理論が「男性性と女性性は一次元上のもではなく、両極でもない」という考えを示し、高い水準で両方の属性を示す人は「両性具

有性」であるとしたことによる。そこで男性性中央値よりも高く女性性中央値より低いスコアの被験者は「男性性 (M: masculinity)」、女性性中央値よりも高く男性性中央値より低いスコアの被験者は「女性性 (F: femininity)」とされた。そして両性の中央値とも高いスコアの被験者は「両性具有性 (A: androgyny)」、両性の中央値とも低い被験者は「どちらでもない (U: undifferentiated)」とされた。したがって「BSRI」から4タイプの性役割が導かれる。

図 2a は両親、父親、母親、娘の性役割タイプの比率を示したものである。両親全体では「両性具有性」(A 群: 31.1%)、父親では「男性性」(M 群: 41.3%)、母親では「女性性」(F 群: 35.6%)、娘は「女性性」(F 群: 32.4%) がそれぞれ最も割合が高い。図 2b に示す通り、両親では、両性具有性 > 男性性 > どちらでもない = 女性性の順であり、娘は、女性性 > どちらでもない > 男性性 > 両性具有性の順になっていて、世代間の相違が認められた ( $\chi^2=10.47$ ,  $df=3$ ,  $p<.05$ )。なお図 2a から父親と母親を比較すると、父親では、男性性 > 両性具有性 > どちらでもない > 女性性の順になっているが、母親では、女性性 > 両性具有性 = どちらでもない > 男性性、の順になり男女の相違が認められた ( $\chi^2=29.009$ ,  $df=3$ ,  $p<.0001$ )。

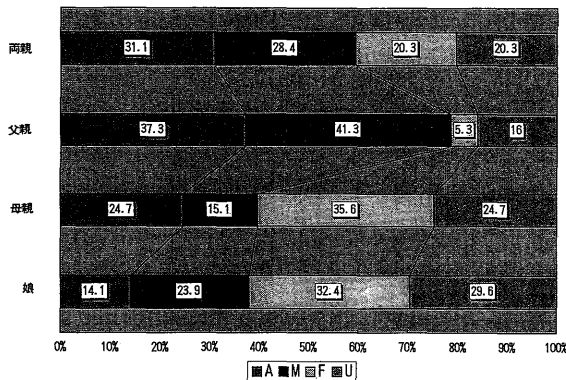


図 2a 両親と娘の性役割 (%)

中年期の父親、母親と青年期の娘

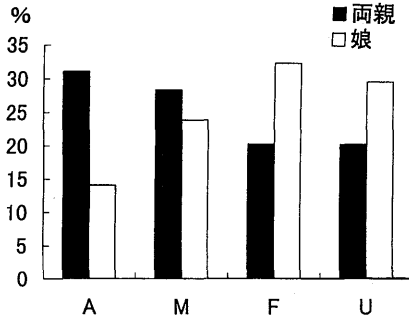


図 2b 両親と娘の性役割

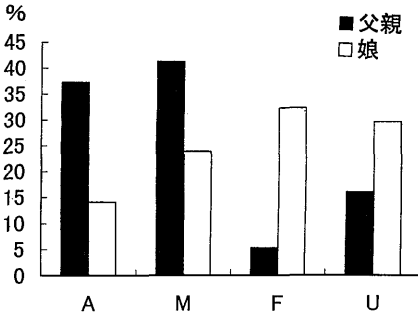


図 2c 父親と娘の性役割

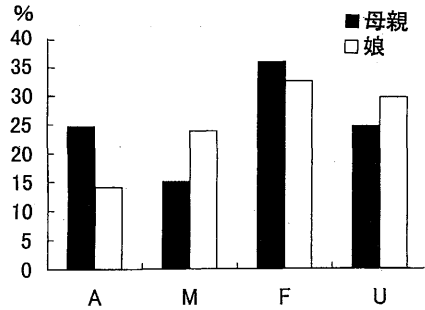


図 2d 母親と娘の性役割

図 2c は父親と娘との比較を示している。父親は「両性具有性」と「男性性」の各群の割合が高く、娘は「女性性」と「どちらでもない」の各群の割合が高い ( $\chi^2=28.346$ ,  $df=3$ ,  $p<.0001$ )。図 2d は母親と娘との比較であり、母親において「両性具有性」の割合が高いようであるが、両者には有意な差は認められなかった。したがって母娘の性役割タイプの割合は類似した傾向を示している。

2) 性役割タイプと親子の相互性

相互性の検討のために採用した田研式の「親子関係診断テスト」は項目の語句の一部を大学生向きに修正された。親の態度とされる「厳格」「拒否」「干渉」

「盲従」「矛盾」の5因子構造をもつ50項目を採用し、3点評価がなされた。父親、母親は各人が自己評価をし、娘は両親にたいして評価をした。

両親の性役割群間における親の態度を検討するために、性役割群の一元配置、分散分析を行なった結果、「干渉」のみに群間の主効果があった ( $F [3, 140]=3.85, p<.05$ )。多重比較 (LSD法) の結果、「女性性」タイプの親は「男性性」と「どちらでもない」のタイプよりも干渉している。「両性具有性」タイプとの間には相違は認められなかった。さらに同じように父親、母親についても分散分析を行なうと父親にのみ「盲従」にたいして群間の主効果がみられた ( $F [3, 71]=3.24, p<.05$ )。多重比較の結果、「どちらでもない」のタイプの父親は「男性性」タイプよりも娘に「盲従」している。「両性具有性」や他のタイプの間には有意差は認められなかった。母親に関してはどの性役割群の間にも親の態度には相違はなかった。また娘についても性役割群間によるかのじよらの親の態度の評価には有意差は認められなかった。

### 3) 性役割タイプと人格的、心理的安定性

自尊感情には親子の世代間の相違が認められた ( $t [153, 75]=3.93, p<.001$ )。

両親と娘のそれぞれの性役割群間における自尊感情を検討するために一元配置、分散分析を行なった結果、両親のみに群間の主効果が認められた ( $F [3, 144]=10.037, p<.0001$ )。多重比較の結果、「両性具有性」タイプは「女性性」と「どちらでもない」のタイプよりも自尊感情が高い。また「女性性」は「どちらでもない」より、「男性性」は「どちらでもない」より自尊感情は高いことが認められた。「両性具有性」と「男性性」の間や「男性性」と「女性性」との間には相違はなかった。

自尊感情と同じように、両親と娘のそれぞれの性役割群間における不安にたいして分散分析を行なった結果、両者とも群間の主効果がみられた ( $F [3, 143]=3.1472, p<.05; F [3, 65]=2.776, p<.05$ )。多重比較の結果、両親は「両性具有性」「男性性」「女性性」の各群が「どちらでもない」群

よりも不安が低い。娘は「女性性」のタイプが「両性具有性」「男性性」「どちらでもない」タイプよりも不安が低いことが認められた。

以上、研究目的にたいして導かれた結果のデータを基に性役割タイプと親子の相互性を中心に次項で考察する。

### (3) 考 察

今回の研究の調査対象者の多くは、両親は「団塊の世代」（1947～1949年生）とよばれ、その娘は「団塊ジュニア」とよばれる人々である。団塊の世代は八百万人ともいわれる巨大な群れとして今日のわが国の人口動態的な特徴を示している。かれらが来るところ必ず不足が生じ、かれらが通りすぎると過剰が残るという現象が認められ、過去、日本の社会はかれらの人生段階の選択にいろいろな影響を受けてきた（橋本、1995）。このような競争社会のなかで中年期を迎え高等教育期の子どもをもつ今回の調査対象者である両親たちの、とりわけ父親たちは学歴も高く、多くが管理職や専門職に就いているという属性を考えると、これら親子をとりまく社会経済的な環境は恵まれていると推測される。

こうした両親は性役割タイプとしては「両性具有性」の割合が娘に比べて大きいことが示唆され、Bem や他の理論家たちが仮定した「加齢による両性具有性への移行」という人格的な特性について、わが国の中年期の人々にたいしても検討に値する結果がみられたものと考えられる。今回、両親の間には性差が認められ、父親は「両性具有性」と「男性性」タイプの割合が高く8割ほどを占める。母親は「女性性」タイプの割合が最も高く、「両性具有性」と「どちらでもない」はほぼ同じ割合であり、「男性性」タイプは最も低い。したがって中年期には父親のほうが母親より「両性具有性」の特性を有するとみられる。生涯を通して男性のほうが女性より「両性具有性」を発達させるという研究報告があり、このことはわが国でも青年期と老年期について実証されている（Hyde, 1979; Shimonaka, Nakazato, Marushima, 1992）。しかしこのような結果は Bem の [BSRI] による分析の場合、その項目構成と測定法の操作的な面が少なからず影響をおよぼしていることを考慮に入れなければならない。

つまり「両性具有性」を発達させるためには「女性性」とともに「男性性」を発達させる必要があるのである。これについて今回の対象者に当てはめると、母親のほぼ半数が主婦であり、こうした中年期的主婦にとって男性と同じような“道具的”“自立的”な面は行動をとるのにかなり困難であると考えられる。それにたいして父親にとっては社会的なリーダー的役割を發揮しつつ仲間や家族にたいして“親密性”や“愛情的”な面も表すことはそれほど難しいとは思えない。

母親と娘との性役割タイプの割合に相違が認められず、両者とも「どちらでもない」タイプの割合がかなり大きいことが注目される。このようにわが国の中年期と青年期の女性に顕著なこの一種のジェンダーのタイプについての解釈は容易ではない。こうした結果は先行研究にもあまり例がない。もっともジェンダーの次元が複数あるという可能性は未だ検証されていないと指摘されており (Morawski, 1987)、性役割概念に基づいたジェンダー研究の容易でないことを伺わせる。「どちらでもない」というタイプの中年期の母親について考えると、今日、かのじよらの多くは女性の自由や解放のことを観念的に知りながらもその青年期に専業主婦の道を選び、いまや家庭を離れての自立は考えにくく、しかも家庭内で自己充足も成就しがたく、ひいてはみずからの女性性さえ危うくなる面があることを示唆しているのかもしれない。あるいは中年期のアイデンティティの危機を示し、生殖性にも取り組めない人格的成熟の停滞を表しているとも考えられる。「どちらでもない」タイプの青年期の娘については女性性も男性性も未熟な状態を示している。青年期の女性は男性よりも男性性、女性性の概念が安定していないという研究報告もみられる (山口, 1985)。

今回の研究で性役割タイプによって親が娘ともつ相互性に影響をおよぼしていることが示唆された。とくに「女性性」タイプの父親および母親は他のタイプに比べて娘に干渉しているとみられる。女性性タイプの父親の割合は少ないのでほとんどが母親の態度とみられるが、かれらは未だ幼いときの娘との関係を色濃くもっていることが推測される。それはこの調査の質問項目に“子ども



の身のまわりのこと”“友達の選び方”“映画、アルバイト、クラブ活動”まで干渉すると答えており、それでいて“親としてもっと子どもにしてやることがあるように思われ心配だ”と子どもへの強迫的な執着や依存が推測される。それについてより詳しくみるために、親子ペアごとのケースについて、性役割タイプと親の態度の関係をダイアグラムにして、一例を図3で示した。このケースは父親、母親とも「女性性」タイプで、母親は娘を非常に干渉していると自己評価しており、娘は両親から干渉されていると評価する以上にかれらを厳格で、拒否的で、矛盾し、娘に盲従していると認知している。このケースの娘の性役割タイプは「どちらでもない」であった。こうした親子の相互性は青年期の娘のアイデンティティ形成の困難さが推測される。また親のほうもいたずらに子にしがみつき、みずからの成熟をないがしろにする「人格的貧困の広がり」(Erikson, 1950)をさまよっているのではないだろうか。

さらに父親のうち「どちらでもない」タイプは娘に盲従していることが示された。とくにかれらは「男性性」タイプの父親より盲従している。盲従的な親の態度は“決めてあることでも子どもがいやがれば許す”や“子どもが悪いことをしても叱れない”などの項目から導かれたものである。いわゆる極端に甘

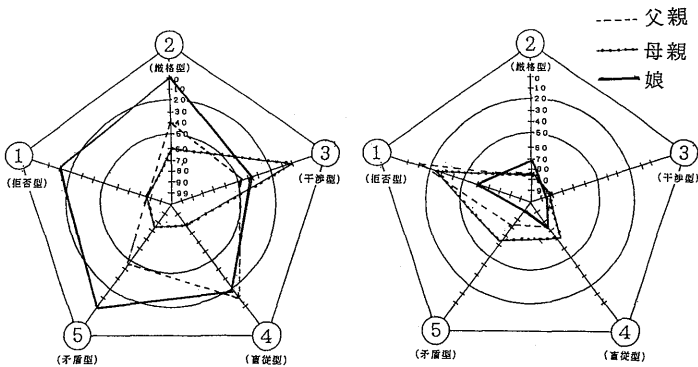


図3 危機的相互性  
(親子不一致型)

図4 危機的相互性  
(親子一致型：〈拒否型〉)

い子どもとのかかわりである。このことは親が意思決定をすることを放棄したような、これもある意味で子どもに依存している。また親と子の権威が逆転したような関係が想像され、親と子、両者の人格的な発達の危機を示唆するものと考えられる。「どちらでもない」タイプの父親は割合としては多くはない(16%)。先行研究においても男性は青年期から老年期にいたるまで「どちらでもない」タイプは「両性具有性」に比べて割合が少ないことが報告されている(Sinnott, 1982)。しかしこのことが成人男性の人格的成熟という点でどのような意味をもつのか、未だあまり議論されてはいない。この点に関してさらに探るために、ケースとして検討してみると、図4に示すように父親、母親、娘とも「どちらでもない」タイプの場合、三者とも親の態度を拒否的と評価している。これは期せずして親子ともその相互性を否定していることを示唆するものと考えられる。親子関係の危機が想像されると同時に、中年期の親の人格的成熟の停滞性と青年期の子どものアイデンティティ発達の危機も予想される。

今回性別と親の態度との関連性を検討する目的のなかに、「両性具有性」タイプが最も良好な親の態度を示すものと仮定していたが、結果のデータは明確なものではなかった。しかし今回調査の対象としたネガティブな親の態度(厳格、拒否、矛盾、干渉、盲従)のすべてと「両性具有性」はまったく関連性がなかった。今後、親の態度に関して異なった局面から検討する必要があると思われる。

最後にどの性別タイプが最も人格的に安定しているかを検討したが、世代間に相違が認められた。親にとって「両性具有性」タイプの人は比較的自尊感情は高く、不安が低いことが示唆され心理的にも安定していることが認められる。また「男性性」タイプの親も同じくらい安定していることも判明した。もっとも理論家のなかには「両性具有性」の特性は男性的な要素を含み、自尊感情と近い関係にあると主張している(Morawski, 1987)。ここに「両性具有性」に関して人間性の本質的現実性としてより一層の概念的追究が必要であると認識された。娘にとってはいずれの性別タイプとも自尊感情とは関係がなかつ

だが、不安については「女性性」タイプの娘がどの他のタイプよりも不安が低いことが示唆された。このことは未だ成熟の途上にある青年期の女性にとって「女性性」を発達させることはノーマルな成長の過程としてとらえられるし、心理的にも安定するものと考えられる。

以上のことから中年期の親にとっては「両性具有性」タイプの人格的特性は望ましく、青年期の子どもの相互性において少なくともネガティブな親の態度としては作用しないと考えられる。今回の調査対象者の父親は「両性具有性」とそれに近い「男性性」タイプの社会的な成功者とみられ、自己の人格的成熟にも自信をもち、良好な親子の相互性をもちうる人々とみられる。未だ実証されていないが「父親の娘へのかかわりは娘の女性性を高める」という説が示されている (Lynn, 1978)。母親については「両性具有性」と同じほど「どちらでもない」タイプが多く、性役割タイプが多少拡散している印象があり、現代の中年期の日本の母親像の複雑さが伺える。

## おわりに

本稿では中年期の親の心理社会的発達課題とされる「生殖性／停滞性」の観点から、性役割を説明変数として成人親子の相互性について実証的研究の報告をして検討した。父親における「両性具有性」と「男性性」タイプが、母親における「女性性」と「どちらでもない」タイプが特徴的であった。これら性役割論の概念は未だ十分議論がつくされていないということが、今回の研究を通して認識された。ジェンダー研究には多くの課題が残されている。

今回の研究は統計的に処理されたデータを中心に報告したが、次には個々のケースを詳細に分析することによって親子のより力動的な関係をみだし、また家族面接を試みるなど臨床心理学的なアプローチからも検討を重ねていきたいと考えている。

引用・参考文献

- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *J. of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 2, 155-162.
- Bem, S. L. 1975 Sex-role adaptability : One consequence of psychological androgyny. *J. of Personality and Social Psychology*, 31, 634-643.
- Bem, S. L. 1981 *Bem Sex-Role Inventory*. Consulting Psychologists Press, California.
- Bengtson, V. L. 1973 *The Social Psychology of Aging*. Chicago : Bobbs-Merrill.
- Erikson, E. H. 1950, 1963 *Childhood and Society*. N. Y. : W. W. Norton & Company, Inc. (エリクソン、E. H. 仁科弥生訳 1977, 1980『幼児期と社会』みすず書房)
- Feldman, S. S., Biringen, Z. C. & Nash, S. C. 1981 Fluctuations of sex-related self-attributions as a function of stage of family life cycle. *Developmental Psychology*, 17, 24-35.
- Fitzgerald, J. M. 1978 Actual and perceived sex and generational differences in interpersonal style. *J. of Gerontology*, 33, 394-401.
- Gilligan, C. 1982 *In a Different Voice : Psychological Theory and Women's Development*. Harvard University Press. (ギリガン、C. 岩男寿美子監訳 1986『もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店)
- Gould, R. 1972 The phases of adult life : A study in developmental psychology. *American Journal of Psychology*, 129, 521-531.
- Grossman, F. K. 1987 Separate and together : Men's autonomy and affiliation in the transition to parenthood. In Berman, P. W. et al. (Eds.) *Men's Transitions to Parenthood*. L. E. A., 89-112.
- Gutmann, D. L. 1975 Parenthood : A key to the comparative study of the life cycle. In Datan, N. & Ginsberg, L. (Eds.) *Life-Span Developmental Psychology : Normative Life Crisis*. New York : Academic Press.
- Haan, L. G. & MacDermid, S. M. 1994 Is women's identity achievement associated with the expression of generativity? Examining identity and generativity in multiple roles. *J. of Adult Development*, 1, 4, 235-247.
- 橋本克彦 1995 新・捨てられる「団塊の世代」『現代』2, 28-52.
- 堀内和美 1993 中年期女性が報告する自我同一性の変化—専業主婦、看護婦、小・中学校教師の比較—『教育心理学研究』41, 1, 11-21.
- Hyde, J. S. & Phillis, D. E. 1979 Androgyny across the life span. *Developmental Psychology*, 15, 334-336.
- 柏木恵子 (編著) 1993『父親の発達心理学』川島書店 5-24.

- 柏木恵子、若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 『発達心理学研究』5, 1, 72-83.
- 久世敏雄、平石賢二 1992 青年期の親子関係研究の展望 『名古屋大学紀要』(教育心理学) 39, 77-88.
- Levinson, D. J. 1978 *The Seasons of a Man's Life*. The Sterling Lord Agency, Inc., N. Y. (レビンソン、D. 南博訳 1980 『人生の四季』 講談社)
- Lynn, D. B. 1978 *The Father: His Role in Child Development*. Wadsworth Publishing Company, Inc. (リン、D. B. 今泉信人、黒川正流、生和秀敏、浜名外喜男、吉森護 共訳 1981 『父親—その役割と子どもの発達』 北大路書房 216-259.)
- Meier, C. A. 1972 *Lehrbuch Der Komplexen Psychologie C. G. Jungs: Persoenlichkeit* (Band IV) . Walter-Verlag A. G. (マイヤー、C. A. 河合隼雄監修 氏原寛訳 『ユング心理学概説4 個性化の過程』 創元社)
- McAdams, D. P. & de St. Aubin, E. 1992 A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts and narrative themes in autobiography. *J. of Personality and Social Psychology*, 62, 1003-1015.
- Monge, R. H. 1975 Structure of the self-concept from adolescence through old age. *Experimental Aging Research*, 1, 281-291.
- Morawski, J. G. 1987 The troubled quest for masculinity, femininity and androgyny. In Shaver, P. & Hendrick, C. (Eds.) *Sex and Gender*. Sage Publications, 44-69.
- Neugarten, B. & Gutmann, D. L. 1968 Age-sex role and personality in middle age: A thematic apperception study. In Neugarten, B. L. (Ed.) *Middle Age and Aging*. University of Chicago Press, Chicago, 58-71.
- Oetzel, R. M. 1966 Annotated bibliography. In Maccoby, E. E. (Ed.) *The Development of Sex Differences*. Stanford University Press.
- 岡本裕子 1994 『成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究』 風間書房 176-196.
- 岡本裕子、松下美知子(編) 1994 『女性のためのライフサイクル心理学』 福村出版
- Persons, T. & Bales, R. F. 1956 *Family, Socialization and Interaction Process*. Routledge & Kagan Paul.
- Rossi, A. S. 1980 Aging and parenthood in the middle years. In Baltes, P. et al. (Eds.) *Life-Span Development and Behavior*, 3. Academic Press. 137-205.
- Shimonaka, Y., Nakazato, K. & Marushima, R. 1994 Androgyny and psychological well-being among older and younger Japanese adults. *Aging: Clinical and Experimental Research*, 6, 43-48.

- Singer, J. 1976 *Androgyny: Toward a New Theory of Sexuality*. Doubleday & Company Inc., New York. (シンガー, J. 藤瀬恭子訳 1981 『男女両性具有 I, II』 人文書院)
- Sinnott, J. D. 1982 Correlates of sex role of older adults. *J. of Gerontology*, 37, 587-597.
- Snarey, J., Kuehne, V. S., Son, L., Hauser, S. & Vaillant, G. 1987 The role of parenting in men's psychosocial development: A longitudinal study of early adulthood infertility and midlife generativity. *Developmental Psychology*, 23, 4, 593-603.
- 鎌幹八郎、山本力、宮下一博共編 1995 『アイデンティティ展望』 ナカニシヤ出版 9-57.
- Vaillant, G. E. 1977 *Adaptation to Life*. Boston: Little, Brown.
- 山口素子 1985 男性性、女性性の二面性 『心理学研究』 56, 215-221.

Summary

Middle-Aged Fathers and Mothers,  
and Adolescent Daughters :  
Sex-Role Types and Mutuality between Parents  
and Adolescent Children

Reiko Marushima

This article first reviews the two primary theoretical models of adult development in the middle years, Erikson's psychosocial developmental task model with concept of "generativity" and Bem's androgyny model across the life span. On the basis of them, our exploratory study of middle-aged parents of adolescent daughters is presented and examined from mutuality of psychosocial perspectives using sex role variables.

Erikson insisted that it must be difficult, though not possible, to achieve generativity, which is an integral component of the healthy adult personality, without the experience of parenting children. Some studies also reported that the largest sex role difference, traditional male-instrumental role versus female-expressive role, was observed during the earlier parenting stages while post parental males and females were more likely to identify cross-sex traits. Bem proposed her androgyny model and hypothesized that the androgyny trait was most adaptive in the society.

In our study, sex types of middle-aged parents and that of adolescence were compared using the Bem Sex Role Inventory. The subjects of 76 parent-child pairs were classified into groups of androgyny, masculine,

feminine and undifferentiated. Also the relation of parental behavior (rigidity, denial, intervention, submission, and inconsistency) to sex role type variables and the relationship between androgyny and psychological stability were examined.

The results revealed that among parents, the percentage of androgyny was the highest, followed by masculinity, femininity, and undifferentiated while the percentage of femininity was the highest among adolescent daughters, followed by undifferentiated, masculinity and androgyny. Moreover, intervention and submission behaviors of parents were significantly related to sex role types while androgyny was not related to any of these parental behaviors. In addition, androgynous parents possessed relatively higher self-esteem and their anxiety were lower. On the other hand, anxiety among feminine adolescent daughters were low, but no self-esteem difference along the sex role dimensions was observed among adolescence.